

Main Text (The essay must be 1 page in English or Japanese)

Essay Title: Ten Years of An Engineering Girl

## 女性エンジニアへの道を切り開いた私の十年

これは 28 歳の女性エンジニア J のストーリーである。

18 歳のときの J は、高校三年生だった。J の母国で理系女性の活躍があまりにも期待されていなかった時代なので、理系の本をちらっとみるだけで「無理だ。やっぱり向いていない。」と嘆きながら、その本を二度と読むつもりさえもない女子友達はよくいた。理系が苦手ではなかったが、そのときの J も当たり前のように文系の経営学専攻を選んで大学に進学した。

21 歳のときの J は、学部三年生だった。専攻の学習は楽しかったが何か足りないと気付いた。理系と同じ教科書を使ったが、微積分講義の先生は本の前半部分しか教えなかった。「そこまで理解してもらわなくても大丈夫です。」と言われても J は不十分だと思った。そしてその時、J の母国はネットブームを迎えていたから、情報系の女性エンジニアが世の脚光を浴び始めた。自然と輝いている理系女性の姿を見て J もその世界に憧れ始めた。しかし、理系の世界を望んだが、それへの道がなかなか見つけれないのが現実だった。周りから「遅くないのか。ありえないじゃないか。」の声もよく耳にした。でもそれからある日、先生からの一言が夢への第一歩を踏み出すきっかけとなった。「理系で訓練された素質はこれからの人生に有益なものだ。その世界への道がある限り放棄しないで。まだ若いから不可能なことはない。」J にとっては一生に忘れられない一言だった。気付きはまだ遅くなく、21 歳の自分だってチャンスがあると思えた大事な一言となった。この夢を一日でも早く実現するために、独学で理系向けの情報処理技術試験を参加したり、理系の共通講義に通ったりしたことによって、確実な行動を意欲的に動き出した。今でも J は、これらの努力がないと、日本の理系大学院へ留学できるチャンスは来なかったと信じている。

時間は矢のように過ぎ去った。27 歳の J はもう来日 5 年目で理系大学院の博士三年生だった。学部を卒業してから日本に来たばかりのとき、修士としてマネジメント・エンジニアリング専攻に入学した。研究室の先生方に助け船を出してもらったが、人に乗り遅れないよう、修士 2 年間 J は人一倍の時間をかけて猛勉強した。とても充実な時期だったが、辛いときはもちろんあった。頑張りたいのに頑張れないたびに、J は「まだ若いから不可能なことはない」の一言を思い出して、勇気もらい元気を取り戻した。そのあと博士後期課程に進学し、勉強以外にも、一人前の研究者になるための誠実さや諦めない心、反省力、伝達力などの素質も意識的に身に付いた。これらの素質は研究のみでなく人間力にも大切なものである。このように日々の努力を積み重ねたのが、J が人に頼られる理系女性として成長してくることに繋がった。

実は、主人公 J は私である。このストーリーは 18 歳から 28 歳まで、女性エンジニアへの道を切り開いた私の十年を述べたものである。

無駄な努力はどこにもない。今年来日 6 年目の 28 歳の私は、工学の博士新卒で、女性エンジニアとして東京の会社で働く新人となった。キャリアのスタートに立つ私は、職場の女性エンジニアの先輩方を見習いながら、この十年の経験と身に付いた素質を生かし、仕事上の期待感がいっぱい達成感もある日々を送っている。今はとても幸せだと思う。そして、これまでを振り返り、先生の一言のお陰で、あのとき女性エンジニアへの道を切り開くのはまだ遅くなかったと悟れて非常に感謝している。一方、大学時代の私のように、理系の世界を望んだがその道がなかなか見つけれない女の子は数少なくないと思う。私のストーリーによって、これらの子たちを理系の道へ導き、自分だってチャンスがあると思ってもらうのが一番大事だと思う。気が付けば、最近日本で「理系女性養成プログラム」、「女性研究者支援」などの政策はよく見られ、理系女性の活躍がますます期待されているとても良い時代が到来していると肌で感じている。これから日本と私の母国で、自分の経験を生かして若手女性エンジニアの育ちなどに寄与ができれば、これ以上うれしいことはないのだと思う。